

ログハウス仮設住宅が目指すもの ー福島県の復興に向けてー

株式会社 木の力 代表取締役 志賀 正敏

1

今回の震災の福島県の背景とログハウス

2

■応急仮設住宅として求められる 目的と今回の長期化の予想への対応

原発避難という福島県の特種な避難を踏まえた上で

- ①組み立てが容易であること
(場所を移転しても構造性能を落とさない)
- ②長期化が予想される避難生活において2年を越えた複数年
の夏と冬に耐えられる性能と持つこと
(場所を移転しても環境性能を落とさない)
- ③日常として生活に溶け込みやすい道具であること
(福島県の地場材利用)
- ④前向きに生きるための町が形成できること
(配置計画の重要性)

3

■いわきの木材事情と今後の可能性

写真：福島県 農林水産部林業振興課 HP より転載



- ・震災後の福島県産材に対する風評被害に対して地元福島県内で流通拡大や地場材活用が求められる。
- ・福島県内では会津・中通り・浜通りの3地域それぞれの地域事情や独特の流通経路があり、県内に流通している。

4

■ログハウスに至までの経緯

公設製作：日本ログハウス協会
+ はりゅうウッドスタジオ
+ 日本大学工学部建築学科道徳研究室

【モデル団地1 提案書】 配置図

近隣環境

住宅の間に公共施設を設ける。これにより建物の配置に比べ、積極的な環境調整の中に広がりが見られる。そのことにより、環境が確保しやすくなり、量も増やすことができる。また、集客を促して生まれるコミュニティが、地域の活性化につながる。



東屋・広場

東屋と広場は防災避難場所として、東屋は作業場の利用やちょっとした集客など、住民のコミュニティ形成活動に活用する。また、近くに遊歩道を設置することで、近所での散歩や散歩を楽しむことができる。日差しが強い東屋は、テントなどを設けて日陰を作り、涼しい場所として利用できます。

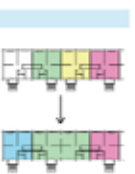


■田舎でできる道路と駐車スペース

敷地を大きく開通できる道路を計画することで、駐車場を住宅のすぐ近くに設置することが出来る。また、郵便・回収などの利便性にも配慮した。その他、散歩・ジョギングなどにも活用でき、気候も気候などの住民の健康にも配慮した。

■2戸→1戸化

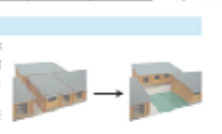
将来的にある計画の住民が仮設住宅地を離れて、仮設住宅が空っぽになってきたら、取り壊して2戸を1戸に改造することが出来る。そのことにより、1戸あたりの仮設住宅数を減らし、より快適な住まい方が出来る。



■減築への対応

改善もある程度済み、作業が済みはじめてきて、減築の可能性が出てきた段階になったときには、仮設住宅を解体し、その部分を取り壊して周辺住民が活用する。

0 20m 40m 60m 80m 100m
1/1000



■集合施設+α

敷地中心近くに配置することで、企画されたイベントなどを進めて、住民の集いの中心となります。その際の集いの利便性にも配慮している。集いの場には住民の集いの場として、夜間などの機能を設けることで、家族生活のサポートがしやすくなり、集いの場を整えます。



■共用空間

仮設住宅地の中心に集約的に設けるように共用空間を設けることで、小さなコミュニティを形成して、大規模なコミュニティを促す。さらに、雪を溜める場所としても利用することが出来る。



■ログハウスの利点

国内産の木材を使用したログハウスによる、木の温かみのある住宅を提案します。ログハウスの利点

- ①木の温かみで断熱性・防水性が高く湿度のコントロールがしやすく、健康に配慮しにくい。また、湿気にも強いので、湿度の少ない快適な暮らしが出来ます。
- ②セルフレッドが可能で環境が比較的簡単にできる。高層化する場合にはそれぞれ個性のあった家に成長していきます。
- ③木材のみで完成。塗料や装飾は必要ありません。ログハウス等は化学物質や有害物質等の心配が少なく済みます。
- ④釘等を使わず長い材料を使って組み立てるので、木材のリサイクルしやすい高くなります。

■今後の展開

仮設住宅地としての役割が終わった後の再開発として、仮設ログハウスをキャンプ場のテラスとして活用したり、パブリックスペースでもう一歩活用できる。また、敷地に対しては、住宅地などの計画の基盤として、ログハウスで建てた集客場を活用できる。

配置上の留意点



■配置計画の特徴

配置計画：日本ログハウス協会
+ はりゅうウッドスタジオ
+ 日本大学工学部建築学科道徳研究室

